

2025 年 8 月 20 日

アーカスプロジェクト 2025 いばらき | アーティスト・イン・レジデンスプログラム

アーティスト決定



His childhood landscape was shaped by houses unfinished.

2025 年度のアーティスト・イン・レジデンス(※)プログラムにおいて招聘する 3 人のアーティストが決定しました。海外からはインド在住のアヴニー・タンドゥン・ヴィエラと、オランダ在住のイブラヒム・クルト、国内からは東京在住の佐藤浩一^{さとうこういち}を迎えます。アーティストは、8 月 29 日から 11 月 26 日までの 90 日間、茨城県守谷市のアーカススタジオを拠点に滞在調査と制作に取り組めます。

今年度は 453 件 (77 カ国・地域) の海外在住者からの応募と、19 件の日本在住者からの応募がありました。海外在住者からの応募は昨年度比で 15 カ国・地域増加しました。これはアーカスプロジェクトがより多くの地域で認知され、関心が高まっていることを示しています。審査員に大坂紘一郎氏^{おおさかこういちろう} (キュレーター) と神谷幸江氏^{かみやゆきえ} (国立新美術館学芸課長) を迎え審査会を実施し、議論を経てアーティストを選定しました。9 月 5 日にアーティストを囲んでの歓迎会、また滞在の終盤に活動の成果を発表するオープンスタジオを開催予定です。ぜひ事前の告知、取材にご協力賜りますようお願いいたします。

プログラム期間 2025 年 8 月 29 日 (金) ~ 11 月 26 日 (水) 計 90 日間

応募件数 海外在住枠*: 453 件 (77 カ国・地域)

国内在住枠*: 19 件 *国籍は問わない

(※) アーティスト・イン・レジデンスとは

アーティスト・イン・レジデンス (AIR) とは、アーティストをある場所に一定期間招き、創作活動に集中する時間と場所を提供する仕組みです。国境を越えて移動し、異なる文化や環境に身を置くことは、アーティストに新たなアイデアをもたらす、多角的な視点から作品と向き合う機会を作ります。そして、アーティストたちと地域住民との交流は、それぞれの日々の暮らしに彩りや気づきを与えます。そういった相互作用も、AIR の醍醐味です。

アヴニー・タンドウン・ヴィエラ Avani Tandon Vieira



撮影：Riya Behl

インド生まれ、在住。キュレーターで批評家、またアーキビストとして、批判理論のための場づくりや共同での作品制作、実践を伴う研究に取り組む。一般的に理解されている形式や空間に対する認識を疑い、解体し、それらに代わるものを構築する。活動の一部として、抵抗の場としてのオープンアクセス・アーカイブ「The Museum of Ephemera」や、インドとパキスタンの若手作家のためのデジタルプラットフォーム「The Pind Collective」を運営している。また、カメルーンの RAW Académie（ロウ・アカデミー）や光州ビエンナーレなどのプロジェクトに参加し、既成の地図を解体して実験的に再構築する地図やトラウマと街の記憶をテーマとした映像作品などを作っている。

【アーカスプロジェクトでのプラン】

市民とともに取り組む民主的な地図づくり。

所与の地図を批判的に考察し、個人の情緒や情動などから特定の場所を読み解き、新たな地図を作る。その過程で人びとの社会空間に対する認識を変えることを試みる。対象とする場所の選定、掲載する情報の選択と排除、読み手との関係性などを、権力から解き放ち、市民の視点や経験から捉え直すことにより、創造的で民主的な地図づくりを実践する予定。滞在の序盤に地図制作の類型や方法論について専門家に聞き取りを行い、その後、市民とのワークショップにより、守谷や近隣市町の空間把握と地図への展開を図る。（例：市民一人ひとりが災害の記憶やその土地で暮らす経験から編む地図など。）



（上）The City is not a Line

2024年、ワークショップ、セミナー、インスタレーション

（下）The Museum of Ephemera

2020年～、オープンアクセス・アーカイブ

イブラヒム・クルト Ibrahim Kurt



トルコ東部の山岳地帯にあるクルド人の家に生まれ育ち、現在はオランダで活動している。近年は、映像、インスタレーション、パフォーマンスをととして、移民である作者が「故郷」を見つけていく過程で複層化する自身の帰属意識を描き、観るものに民族の分散や、生まれた土地から離れて暮らす経験についての対話を促す。私的な経験をクルド人の総体的な経験と結びつけながら語る手法は映像作品にも表れている。共同制作した《Our house is only half finished》では、自身の脆く移ろいやすいクルド人としてのアイデンティティが、故郷でよく見られる繰り返し建て直されながらも未完成のまま放棄された家々になぞらえられている。



His childhood landscape was shaped by houses unfinished.



So many houses that have been built, rebuilt. So many that have been abandoned.

(上・下) **Our house is only half finished**

Lucie Fortuin (ライター、研究者) との共同制作
2024年 映像

[アーカスプロジェクトでのプラン]

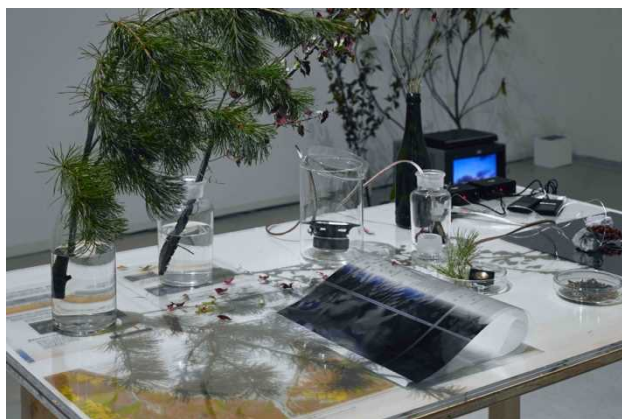
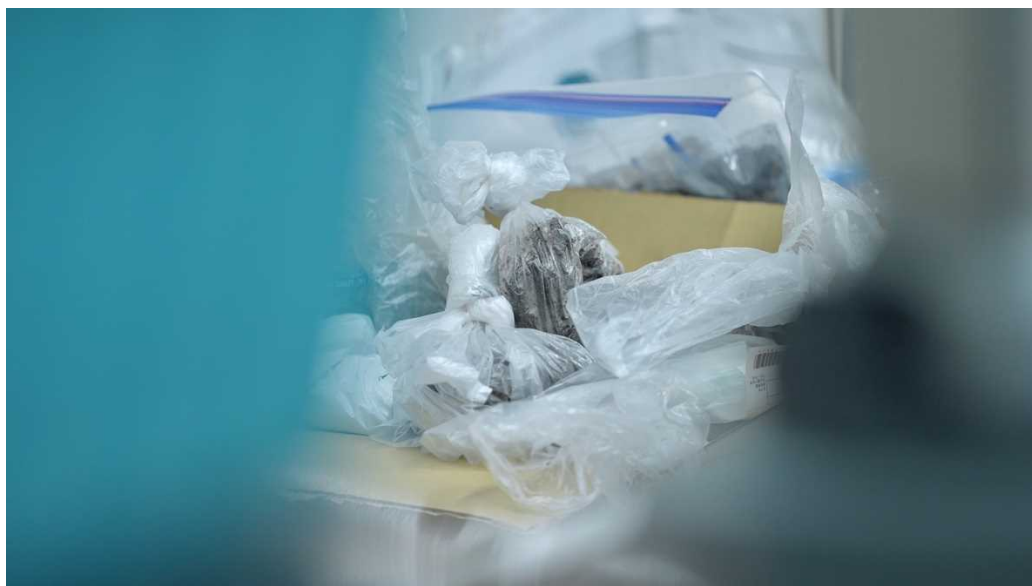
クルドの文様をととしてクルド人のアイデンティティを探る旅。

日本でクルドの文様を探し、映像や写真、言葉によってその旅を記録する。クルドの家庭で使われるタイルやラグ、カーペットなどに見られる馴染みのある文様を馴染みのない地で探す行為は、離れた場所から故郷と向き合い、自分にとって故郷がどういうものであるかを捉え直すことでもある。クルドの移民が多く住む埼玉県川口市や蕨市、また文様の研究を深められる博物館などの施設への訪問を予定している。移動する先や出会う人との関係によって絶えず変化する自身のアイデンティティのあり方を探り、作品化する予定。

佐藤浩一 Sato Koichi



東京都を拠点に活動。自然環境と生き物、また生産と消費から社会を読み解き、映像だけではなく香りや音を組み合わせた作品制作に取り組んでいる。制作の出発点には環境や社会に対する疑問があり、それらが具体的に現れ出ている場に赴いてリサーチを行う。近年の作品に、東京都西部の水道水が PFAS によって汚染され、それが人体に異物として入ってくることから、みずからの身体が意識せずとも他者化している可能性に向き合ったものがある。疑問からリサーチを経て作品化し、それを総体的な鑑賞体験へと開きながら、環境と生き物の関係性をさまざまな角度から考察する。



(上) 《武蔵野の流水》2025年～、映像

(下) 《沈潜》2019年 インスタレーション、パフォーマンス

[アーカスプロジェクトでのプラン]

人間、非人間、科学技術が接触する場としての茨城を読み解く。

国の政策によって生まれ、科学技術に関する知識と技術が結集した2つの地、東海村とつくば市についてリサーチを行い、作品制作に取り組む。2つの地は、科学による人間の理想を求めて実現されたが、現実には、明るい未来とともに危機や破綻の可能性を内包している。そうした両義性に注目し、科学主義やユートピア思想を現実化する街区や施設の図面を調査し、立体的な空間把握を試みる。また現地に赴き、研究施設を取り囲む林で植物や泥炭を採取し香りを抽出するなど、科学技術と人間の関係について視覚以外の方法でも表現する予定。近代社会における「人間」像について考え、また非人間の観点から「人間」を見つめ直す取り組みとなる予定。

ティー・ミーティング（アーティストの歓迎会）

お茶を飲みながらアーティストと交流する会です。どなたでもご参加いただけます。

日 時：2025年9月5日(金) 11:00-12:00 ※予定

会 場：アーカススタジオ

オープンスタジオ

アーティストたちが活動の成果を発表します。期間中には、トークイベントや子どものための鑑賞ツアーなどの関連プログラムも実施します。

日 時：2025年11月13日(木) — 16日(日) 13:00-18:00

会 場：アーカススタジオ

入 場：無料

◎ 詳細はウェブサイトでお知らせします。



アーティストの詳しい紹介はこちらからご覧いただけます。

<https://www.arcus-project.com/residence-program/artist-in-residence-program/>

主催：アーカスプロジェクト実行委員会（茨城県、守谷市、公益財団法人茨城県国際交流協会）

認定：公益社団法人 企業メセナ協議会



社会創造アーツファンド
[公社]企業メセナ協議会

ご取材のお申し込みは下記へお願いいたします。

お問い合わせ先

アーカススタジオ（火-土 10:00 -18:00）

〒302 - 0101 茨城県守谷市板戸井 2418 もりや学びの里内 担当 | 恩田・藤本

TEL | 0297-46-2600 E-mail | arcus@arcus-project.com Web | www.arcus-project.com

アーカスプロジェクト実行委員会事務局

茨城県政策企画部地域振興課 担当 | 廣瀬・川上 TEL | 029-301-2678

アーカスプロジェクトの概要

1 経緯

東京藝術大学の取手市進出等を踏まえ、茨城県南地域において国際性と芸術をキーワードとして新たな施策の展開が求められたのを受け、平成3年度に、東京藝術大学長の平山郁夫氏（当時）を委員長とする検討委員会を設け、「国際芸術文化交流拠点整備構想」（＝アーカス構想）を策定した。

このアーカス構想の策定を受け、アーカスプロジェクトとして平成6年度にプレ事業を実施、平成7年度から実験的に事業を行い、平成12年度から本格的に展開し、令和6年に30年目を迎えた。滞在期間中に行う創作活動を支援する「アーティスト・イン・レジデンス」プログラムを核として、身近に芸術家と交流し、楽しみながら芸術創造活動を体験できる機会を提供することを通じ、県民が創造力を発揮できる環境を創出し、魅力ある地域づくりと本県のイメージアップを図る。

※「アーカス=ARCUS」とは、ラテン語で「門」を意味し、本県が芸術の門となることを、また、「ART×FOCUS（＝芸術の中心地）」となることを願って命名。

2 目的

海外から、現代芸術分野の若手アーティストを一定期間茨城県に招き、アーティストが滞在期間中に行う創作活動を支援する「アーティスト・イン・レジデンス」プログラムを核として、身近に芸術家と交流し、楽しみながら芸術創造活動を体験できる機会を提供することを通じ、県民が創造力を発揮できる環境を創出し、魅力ある地域づくりと本県のイメージアップを図る。

3 推進体制

主催：アーカスプロジェクト実行委員会（茨城県、守谷市、（公財）茨城県国際交流協会）、茨城県南芸術の門創造会議（茨城県、取手市、守谷市、東京藝大、アーカス、取手アートプロジェクト）

後援：招聘アーティスト出身国の大使館、国際交流基金

協賛：令和6年度（11社）R7.3.31現在

関彰商事(株)、鹿島埠頭(株)、(株)常陽銀行、(株)筑波銀行、守谷市商工会、(株)茨城ポートオーソリティ、(株)壁工房、中央労働金庫、茨城県信用保証協会、(株)千葉銀行、アサヒビール(株)

認定：（公社）企業メセナ協議会社会創造アーツファンド

ネットワーク：Res Artis、AIR NETWORK Japan

《アーカスプロジェクト実行委員会》

会長	：茨城県知事
副会長	：茨城県政策企画部長、守谷市長
監事	：（公財）茨城県国際交流協会理事長

事務局：茨城県政策企画部地域振興課（事務局長：地域振興課長）

アーカススタジオ：エグゼクティブディレクター1名
プログラムディレクター2名

【守谷市生涯学習施設「もりや学びの里（旧小学校校舎）」内】

4 主要事業

○アーティスト・イン・レジデンスプログラム

- ・公募によるアーティスト招聘
- ・アーカス・リサーチ（自主指導型のレジデンスプログラム）

○地域プログラム

- ・日比野克彦氏や若手アーティストによるワークショップ開催
- ・アーカススタジオのスタッフ等による講座（アートカレッジ）開催